



図① (左から)《悩ましい夜》2018年，陶，H 33×W 22.5×D 20 cm. 《糸のような三日月》2018年，陶，H 51×W 33×D 18 cm，ともに前橋文学館蔵

はじめに

造形と言葉の親和について考える。言葉だけでは言い表せないことがあると信じているからこそ、私は実在の素材を扱い、ものづくりを続けている。だが同時に、物理的な制約を受けず、形をもたないものごとについても自由に語る言葉への憧れを持っている。複雑な情報を知覚できるが、現実の空間に囚われている造形に、矛盾も許してしまう、言葉による思考を取り入れることができれば、どんなにか豊かな表現になるだろう。

意識をしていると、言葉に向き合う機会がやってきたりする。2017年、前橋文学館から私のもとに興味深い話が舞い込んできた。萩原朔太郎の詩「猫」（詩集『月に吠える』より）さながらの黒猫2匹を制作し、朔太郎の生家の瓦屋根の上に設置したいので協力してほしい、という内容である。私が前橋出身だということや、以前にも朔太郎の著書や詩をモチーフにした作品をつくっていたこともあり、私にできることがあるならば、と快く協力する約束を交わした。文学に手招きをされたような心持ちだった。

前橋文学館の新しいアイデアを形にするにあたって、関わった期間も長くなり、その間に前橋文学館での2つの企画展、「詩集『月に吠える』100年記念展」と「サクタロウをアートする——解釈の快楽——」への出品の機会もいただいた。美術館ではなく文学館という場所では、作品はこれまでと全く別の見方をされる。言葉や文学と（今回は特に朔太郎の表現と）、この作品はどのように関わっているのか、という視点が大前提としてあるのだ。私はこれを好機として、言葉や言葉の表現をモチーフとすることについて、きちんと考えることに決めた。そこで、朔太郎の「猫」の詩をモチーフにした作品《糸のような三日月》と《悩ましい夜》(図①)の完成までの記録を軸として書き記そうと思う。

萩原朔太郎と前橋文学館

日本近代詩の革新者として知られる詩人・萩原朔太郎は1886（明治19）年、群馬県前橋市生まれ。多数の雑誌に詩を発表、室生犀星や北原白秋ら詩人たちを招いての交流、マンドリン倶楽部を主宰するなど、前橋での活動は盛んだったようだ。初の詩集『月に吠える』（1917年）や、その後の『青猫』（1923年）などに収められた作品の多くが前橋で書かれたものだという。

その地で朔太郎研究を支えているのが、「萩原朔太郎記念・水と緑と詩のまち 前橋文学館」である。前橋文学館は朔太郎の詩にも登場する広瀬川の河畔に位置しており、文学館の入り口正面に架かる「朔太郎橋」を渡ったところには、朔太郎の生家の一部を復元した「萩原朔太郎記念館」ができ、2017年4月から新たに一般公開されている。以前は市内の別の公園内に移築されていたものが、この場所へ再び移築、整備されたのだ。広瀬川沿いは、シンボリックな朔太郎の銅像や、前橋ゆかりの詩

人の詩碑が点在する緑豊かな遊歩道となっていて、この辺りで生まれ育った私にとっても馴染みが深い。

朔太郎の孫である萩原朔美さんが2016年に前橋文学館の館長に就任してから、これまでの文学館にはなかった新しい切り口の企画展やイベントを積極的に開催している。同じく前橋市立の美術館「アーツ前橋」とも連携を強めており、前橋の街全体が自分たちらしい新しい表現を探している、そんな雰囲気を感じていた。

そんなとき、前橋文学館が企画・開催の展覧会「詩集『月に吠える』100年記念展」への出品依頼を受けた。私に求められたのは、私の専門である陶作品。文学館からのこの意外な誘いに、《寝待ちの月》（2015年）と《糸のような三日月》（2017年）⁽¹⁾という朔太郎の作品に登場する猫たちをイメージした作品を出品した。

2017年7月22日から10月9日に開催されたこの展覧会は、詩集『月に吠える』刊行から100年を迎えることを記念して企画されたもので、「愛憐」「恋を恋する人」を含む『月に吠える』無削除本の展示を目玉に、朔太郎の自筆原稿や草稿ノート、北原白秋の直筆原稿のほか、田中恭吉、恩地孝四郎らの挿画も展示。現代作家が『月に吠える』の詩をイメージして作ったオブジェや映像作品までも並んだ。2階展示室の入り口には『月に吠える』の装丁を模した扉が新しく設置され、来場者はその大きな本の表紙をめくって朔太郎の詩の世界の中に入っていくという演出がなされるなど、工夫が凝らされた。同時開催の『月に吠えらんねえ』展は、清家雪子さんの同名の漫画を扱った企画で、ここでも文学館の枠組みを広げるような試みを行っている。

朔太郎生家の屋根の上に黒猫2匹を乗せるという計画も、この展覧会の頃から具体的に進み出したのだった。

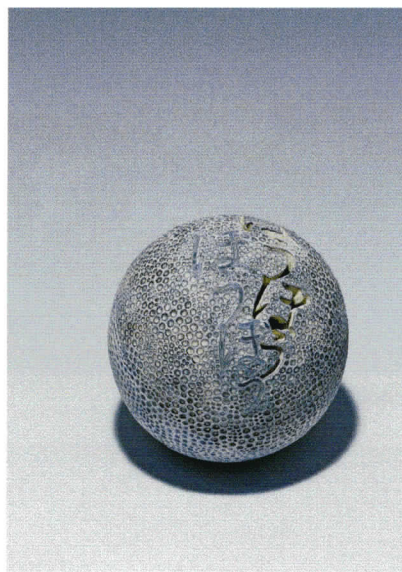
文学の中の動物のすがた

私はこれまでに、多くの動物のかたちの作品を制作してきた。しかし、生命ある動物そのものを表現しようとしてつくっているというよりも、人間が長い時間を掛けて作り上げてきた動物のイメージをモチーフにして表現していると言った方が正しい。その姿は人間の鏡だ。動物と人間という関係の対比から、人の思考の営みを描き出したいという思いがある。象徴、寓意としての動物、神話や伝承、物語、表現の中の動物、様々な動物像を考える中で、これまでも動物を象徴的に扱った中島敦の『山月記』やデイヴィッド・ガーネットの『狐になった奥様』等、文学作品をいくつか直接的にモチーフにしてきた。

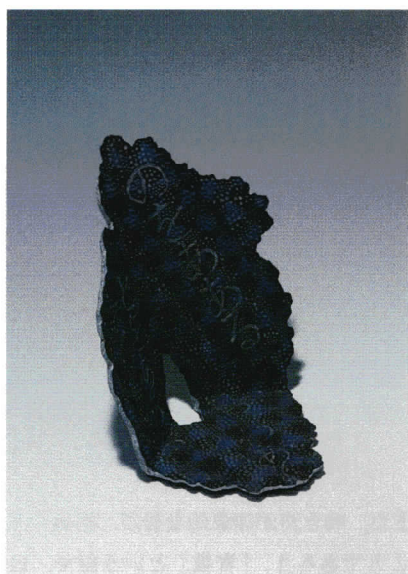
萩原朔太郎を扱った作品のうち、屋根の上へ乗せる《糸のような三日月》と《悩ましい夜》へと繋がる作品となったのが、詩集『月に吠える』の本の成り立ちへもアプローチした3点の連作である。2015年に彩鳳堂画廊（東京）にて開催された、本・書物、現されたものをテーマにしたグループ展「Books



図② 《夜はなおさら》2015年，陶，H 24.5×W 15.5×D 26 cm，萩原朔太郎『月に吠える』日本図書センター，四六判，個人蔵



図③ 《ぼんぼりのような薄明かり》2015年，陶，H 11×W 11×D 10 cm



図④ 《見知らぬ犬》2015年，陶，H 19.5×W 13×D 15 cm



図⑤ 《夜はなおさら》部分

＋」に合わせて制作をした。

『月に吠える』の出版に際し、北原白秋は序文を、室生犀星は跋文を寄せている。朔太郎が詩を発表していた雑誌『朱槿』の主宰は白秋。朔太郎はこの雑誌に掲載された犀星の詩に感動し、手紙を出し交流を深めていた。こうした関係だった二人は、どちらも寄稿文の中で、「萩原君。」と優しく呼びかけている。朔太郎のどうにも行き場のない悲しみに対し、二人のこの呼びかけに、私は救われる思いがした。そこで私は、三人の詩人が表現する吠える声を、文字として作品に取り入れることを試みた。中に収められた詩篇ではなく、『月に吠える』の本そのものをモチーフにしたのだ。

《夜はなおさら》(図②)は脚の悪い白い子犬。前足で押さえているのは詩集『月に吠える』だ。表面に刻んだのは、白秋に

聞こえる何かが吠える声、「びようびよう」⁽²⁾の文字。犀星に見える犬が「ほうほう」⁽³⁾と吠える声は、丸い月のかたちに(図③)。朔太郎自身の泣き声とも言える特徴的な犬の声、「のをある とをある やわあ」⁽⁴⁾は詩集『青猫』の中の「遺伝」に登場するものだが、それは犬の影法師のかたちに刻み込んだ(図④)。

これまで私が続けてきた、作品の表面全体にびっしりと点を彫るという手法は、色彩を複雑に見せ、表面に奥行きを出すための行為である。点描画の筆のタッチのようなもので、つくる内容に直接的には関わりのない、ものの質感に関わる行為だった。しかし、文字を刻むことは、そこに作品の内容的な意味を持ち込む試みでもあった(図⑤)。文字は作品のかたちに沿って立ち上がり、見る人に音を想起させるのである。



図⑥ 萩原朔太郎記念館



図⑦ 萩原朔太郎記念館・書斎



図⑧ 《屋根の上の猫の為のドローイング1》,
2018年、紙、鉛筆、水彩、他、
29.7×21 cm



図⑨ 《屋根の上の猫の為のドローイング2》,
2018年、紙、鉛筆、水彩、他、
29.7×21 cm

屋根上の「猫」

《糸のような三日月》と《悩ましい夜》(図①)のモチーフとなった「猫」の詩を次に引用する。作品タイトルもこの中からとっている。

猫

まつくろけの猫が二正、
なやましいよるの家根のうへで、
ぴんとたた尻尾のさきから、
糸のやうなみかづきがかすんでゐる。
『おわあ、こんばんは』
『おわあ、こんばんは』
『おぎやあ、おぎやあ、おぎやあ』
『おわああ、ここの家の主人は病気で』

萩原朔太郎『月に吠える』より⁽⁵⁾

これもまた、鳴き声が印象的な詩だ。病気の主人とは、朔太郎自身のことであろう。「青猫」という詩や、短編小説の『猫町』や『ウォーソン夫人の黒猫』にも見られるように、朔太郎は作品の中で、猫をやや不気味に、悲しみや不安などの象徴のように扱っているように思うが、この詩にもそれが表れている。

前橋文学館との何度かの話し合いの末、私が陶の黒猫2点を、実際に制作させてもらおうということに決定した。もちろん、瓦屋根の上に固定する為の構造を施工業者と検討し、雨風に晒されても破損しにくい工夫を施すことは必須であるが、どうにかそれをクリアする道筋は立てられた。

萩原朔太郎記念館として現在残っている生家の建物は、図⑥の左から、書斎・離れ座敷・土蔵の3つである。中でも、最も屋根の低い書斎の瓦屋根の頂に「猫」作品を設置することに決めた。軒先に立っても、無理なく頂が見えるコンパクトな造りだ(図⑦)。この書斎は、生家の裏庭にあった味噌蔵を、セセッション式の内装に改造したもので、中には朔太郎がデザインした草花模様の意匠が施された机と椅子が置かれている。マン



図10 《糸のような三日月》制作過程



図11 《悩ましい夜》制作過程



図12 《悩ましい夜》拡大

ドリンを演奏する際にも使われ、白秋や犀星もここへ招かれていたそうだ。この屋根に、朔太郎の心象を映した真っ黒けの二匹の猫が乗っている、という状況をすんなりと想像できた。屋根の下の様子を伺うような視線の猫たち。一方は尻尾をピンと立て、もう一方は背を丸めて座っている。

この詩をモチーフにするならば、やはり、猫の鳴き声を取り入れたいと考えた(図8・9)。ひらがなの形も音も、そのまま素材にし、組み合わせれば、単語や文節として意味が生まれる。表面に文字を刻むことで、朔太郎の猫の声という意味までも、やきものの質感に取り入れる。質感は視覚や触覚で知覚するものだが、例えば、“ざらざらした”や“布目のような”と形容されるような質感に、“朔太郎の猫の声の”質感が生まれたならばどうだろう。日本語の意味までも読み取れるものになれば、表面の質感がもたらすイメージは格段に豊かになるに違いない。

私が朔太郎の作品から連想するのは、水に溶いたプルシアンブルー。黒猫という依頼ではあったが、深い紺青を含めた16色の土を使用している。それを組み合わせて、陶芸の手びねり

技法でつくりあげた猫の体の表面に重ね、点のタッチと、朔太郎の猫の声を丁寧に削っていく(図10・11)。これに透明な釉薬を薄く掛けて1250℃で焼成すると、黒の中に混ざる青が、黒色をより艶やかに濃く見せてくれるという算段である。こうして、よく見れば複雑な黒色をした朔太郎の猫が焼きあがった(図12)。

おわりに

完成した作品は、企画展「サクタロウをアートする——解釈の快楽——」の会期の途中から、前橋文学館の展示室に2点並んで展示された⁽⁶⁾。私の細かなこだわりを間近に見てもらえる機会をいただいたのだ。会期終了後に、萩原朔太郎記念館の朔太郎生家の書斎の屋根の上に設置される予定だが、執筆中の10月8日現在では、施工工事の日程は調整中である。突然現れる屋根上の猫が、朔太郎の作品に触れるきっかけになることがあれば幸いだ。文学はあらゆる創造の源となりうる。色々な読まれ方をし、多様な広がりを見せる今も生きている言葉だとい

うことを感じてほしい。そして反対に、文学への関心から屋根の上の猫に出会う人にとっては、この作品が身近で親しみやすいものになってほしいと願う。

人は言葉の獲得とともに、象徴的な思考ができるようになった。言葉で語ること、言葉で表現することは、人間の根源的な営みだ。だからもちろん、言葉は他の芸術分野においても、決して無縁なものではない。境界の向こう側を覗いてみれば、新しい気付きがある。今回は猫の様子や作品のタイトルを詩からとった他、一つの方法として表面に特徴的なひらがなの音を刻み、質感として取り入れた。私の造形に言葉や言葉の表現を取り入れることは、私自身や作品に対峙する人の認識する世界をほんの少し広げ、思考をするための仕掛けなのである。

註

- (1) この作品も朔太郎の「猫」をモチーフにした作品ではあるが、2018年作とは別。
- (2) 北原白秋「序」、萩原朔太郎『月に吠える』日本図書センター、1999年 底本：萩原朔太郎『月に吠える』感情詩社・白日社、1917年
- (3) 室生犀星「跋」、同書
- (4) 萩原朔太郎「遺伝」、三好達治選『萩原朔太郎詩集』岩波文庫、岩波書店、1952年 底本：『青猫』新潮社、1923年
- (5) 萩原朔太郎「猫」、前掲書(2) 初出：「ARS」第1巻第2号、1915年5月
- (6) 朔太郎の作品から着想を得た、現代のアーティストたちの作品が展示された(会期：2018年7月28日—10月14日)。私は、7月28日からは図⑧⑨のドローイングのみを展示し、9月6日からは《糸のような三日月》《悩ましい夜》(図⑩)を展示台に置いて追加で展示した。

参考文献

- ・萩原朔太郎、三好達治選『萩原朔太郎詩集』岩波文庫、岩波書店、1952年
- ・萩原朔太郎『月に吠える』日本図書センター、1999年
- ・萩原朔太郎『萩原朔太郎 ちくま日本文学036』筑摩書房、2009年
- ・萩原朔太郎記念・水と緑と詩のまち 前橋文学館
<http://www.maebashibungakukan.jp>、参照日：2018年9月16日
- ・前橋市「萩原朔太郎記念館 概要」2017年8月22日
<http://www.city.maebashi.gunma.jp/kurashi/230/263/265/p003151.html>、
参照日：2018年9月16日